



冬も菜種の花が咲く 常春の房州へ

統計模範御宿町視察の旅

筑波郡久賀村統計調査員 關野忠吉

夏雲の上に富士ヶ嶺秀でけり

五〇

船橋にて千葉行きに乗り換へ、十時十一分千葉驛下車、よく舗装された本道を行くこと五六町、千葉縣廳に到り縣統計課に敬意を表して再び車中のひとなる。これよりいよ／＼房總海岸線となる、五位あたり養老川に沿ふ一帯は沃野廣く、穂に出でし稲は極めて少なく、殆んどが晩稲らしい、我々茨城縣人には一寸奇異の感がある、また所々瓦焼く煙の蒙々たるあり、その土質の何たるかを直感せられる。姉ヶ崎あたりより景観とみに變り列車は波打際をひた走りに走る。

投網する半裸の人や夏の川

貝漁る海女の小笠や残暑照り

岸を離れて、遠く干潟に建てられし鳥居は、海神を祀れるならん、相摸連山は夢の如く、一葦海を隔てて呼べば應へんとす。また木更津あたり蓮田多く線路に沿ふ衾は殆んど蓮の葉に

懸案年を久しうせし、久賀村統計調査員の縣外統計模範町視察旅行も、

秋蠶晩秋蠶の端境の小閑を得て、過ぐる八月三十日豫て縣統計課より指示せられた千葉縣御宿町視察にと出かくることゝなつた。當日羽田主任以下調査員十名藤代驛に集合、午前七時四十七分發上り列車へと乗り込む。大利根鐵橋にさしかゝる頃より、朝霧は隈なく晴れ渡り川原に飛び交ふ白鷺は翼も輕げに群れ遊ぶ。柏驛で船橋きの「ガンリンカー」に乗り換へると、暫く松林の間を車は疾走する高柳あたりより視野や

覆はれて數十町にも及ばんか。

あほられて葉裏の白き蓮かな

青堀を過ぐる頃より窓外に虫の聲頻りなり。

切れ次きにきり／＼す鳴く車窓かな

このあたり別荘多く近代様式の洒奢な建築か目につく。左窓遙かに鹿野山が望まれる、車中客あり、土地のものがらしく我等の爲めに説明大いにつとめてくれた人情の淳朴なるを偲はれて嬉しい。傳へ聞く鶯の棲むてふ鹿野山も今はその頂上に杉の大樹數十本を残すのみである、其の代償として自動車が埃を蹴立てて神野寺の門前まで通つてゐること、これも詮方ない時代の反映とやいはん。

上總湊の邊より、岸壁高きところ、線路を通じ眺望この上なく、恰も紺碧の水鏡、乗客は一齊に窓外に眼を吸はれて思はず絶景を稱ふ、總じて房總海岸線には遼遠多くその幾十なるを知ら

うやく展げ、車窓より吹き込む朝風はいと爽かに、朝の畑には里芋を掘る百姓が働いてゐる。このあたり穀畑は更に見られない、そゞろに大東京の近郊であるといふことを意識づけられる。

中でも里芋、薩摩芋最も多く、胡瓜、西瓜はすでに採りおへて、そのあとに白菜、大根などの二葉を出して居るのが眼につく、やがて右窓間近に船橋無線電信局の大鐵塔が見え出したこの頃車中誰やらが富士の巒姿を見つけてはしやぐ、皆々一齊にその方を見あげる東京灣上遙かに遠く裾雲を覆ふてゐる

す、一曲つくる處遼道あり、出づれば必ず一灣あり、灣に沿ふて町並び曲につれて漁村あり、町ある處海水浴場あり、村ある處漁撈豊かである。

窓涼し相摸連山指呼にあり

名にしあふ鋸山はその名の如く山姿まことに奇である、中腹は絶壁をなして岩崖稜々とも云はんか、やがて列車はその山の中に竄進する、數分を費して遼道を出で山を見あぐればこれはまた異なり、山の北面の突屹たるに比して、南面は鬱蒼たる樹木形容自ら緩らかである。富津那古あたりは枇杷の産出多く、臺地といはず、山の中腹といはず、寸地をも餘す處なく皆これを栽植してゐる。午後一時十五分北條下車驛より數町館山海岸に歩を移す。灣内水深くして汽船の碇泊せるあり、ヨツトの帆走するあり、見るからに壯快そのものである。天麗かに波靜なるの日は、富岳その靈姿を海に映すより、鏡

ヶ浦の別名ありと、右手緩やかに灣に沿ふて那古船形等の村落海を抱いて館山灣をなす、左方尖端に館山航空隊あり、洲の崎燈臺あり、海を隔て、遠く相摸連山に秀づるは伊豆の天城か、山裾は摸糊として雲に覆はる、近く町の東端なる丘陵を城山といひて、里見家の城趾とか、眼を轉じて北方翠巒相連なる處富の山あり、これ八犬山縁の地である。里見家ありし世の榮華を偲びつゝ再び車中の人となる列車は避暑歸りの人で一杯である。

涼しさやヨツトは浪に見え隠れ

ボツボ舟見えたりけり土用浪

なぶらるゝネクタイ涼し磯つたい

陽焼額驛にどよめき休暇あけ

列車はいよ／＼内房におさらばして房州尖端を横断して外房へとひた走る九重千倉あたり大崗の茂れるあるを認める。

夕照に青く靡きぬ蘭田の風

太蘭刈る菅笠の娘は汽車に佇ち
 和田浦江見を経て大海に出る、こゝ
 には有名な仁右門島あり、其の昔石橋
 山の戦に破れた源右府公が勝山の城主
 安西景益を頼つて房州へ亡命した時、
 この島に幾日かを遁れたと傳へられる
 處で、島には島主の誠忠を賞で、永久
 に所領とする頼朝公の御墨付を頂戴
 してゐるといふ。次が鴨川驛かねて案
 内の竹の屋旅館に旅装をとく、一風呂
 浴びて宿の浴衣にくつろひだ旅の気分
 はまた一入である。

翠巒の嶺々を去來や夏の雲

ペランダの海風に佇つ浴衣かな

明日の行程にあまり夜更しは禁物と
 十時過皆夫々寝に就く、あけさしの二
 階に潮風は蚊帳を波うたせて涼しさい
 はん方なく、折柄十四日の月は仲天に
 懸つて、そゞろに游子の心はせきたて
 られる、眠らんとすれど眼はいよ／＼
 冴えて來るばかり、まゝよと起き上り
 階下へ行つて宿の烙印ある下駄をつゝ

かけて潜に出る、ひとり波打際を逍遙
 さすがは外房、浪も相當大きくやゝと
 もすれば足をさらはれさうである、町
 はづれにある鴨川橋の上に来て袂を吹
 かれつゝ心ゆくまでひとり南國の町の
 夜の情緒に浸りつ傾く月に宿へ歸る。

.....

潮風の孕む袂や夕涼み

月を背に山影妻き闇さかな

潮風に濡れて汀の月更くる

潮騒や旅愁の蚊帳に夜もすがら

宿惜しみ月の汀を往き戻り

あけさしの戸に麻蚊帳の涼しさよ

ビールの座鴨川音頭幾そたび

玫瑰や宿下駄すて、砂踏めり

波の音に旅寝の夢破られて眼を覺ま

せば、夜はしら／＼と明けそめつゝあ

り、欄に倚りて黎明の海洋に眺め入る

東天は次第に薄紅色に彩られ、やがて

日輪は遙かの山の端に赫灼として耀き

渡る、莊嚴とはまことこの事をやいは

ん、やがて女中の案内に沐浴する、朝

湯の爽氣はまた格別である汽車の都合
 で急ぎ朝食をすまして宿を辭す、アス
 フアルトの路を驛に、八時の列車で小
 湊に向ふ誕生寺は俳僧日蓮の有縁の地
 また妙の浦は文部省より天然記念物に
 指定せられてゐる、一行は四人の船頭
 によつて船を出される、岩と岩との間
 を通つて漸く海洋に出る、波頭に乗つ
 た船は揺々として木の葉の如く、降る
 時は奈落の底に沈むよと思はれる、そ
 の間を船頭は「エンヤハー」の掛聲勇ま

しく汗だくの懸命である。漕ぎ行く事
 十數町餘り、明神島の附近に到り楫子
 は櫂を上げて舷を叩く、サー出ますよ
 と杓子に水を汲んで投ぐること二三回
 いよ／＼餌を投げれば清冽なる海水を
 透して、大鯛小鯛が、浮ぶ、浮ぶ、餌を
 やる度に歴々として數ふべく遂には鯛
 の飛沫か衣にかゝるといふ始末全く奇
 觀である折角こゝまで漕いで來ても見
 られないで歸る人もあるとの事に皆々
 大満悦、再び小湊驛に引返し車中の人

となる。

由來東西房總線には遼道多く其の數
 幾十なるかを知らない、驛と驛との間
 にはさまつた様に少なくとも二三、中
 には五つ六つも數へるのさへある、曲
 のあるところ岸壁突屹して海に面し、
 灣あるところ丘陵その背景をなして樹
 木蒼々天然の景觀を加へ、房總廻りは
 自然の映畫であると絶讃するに價する
 興津勝浦等を窓外に眺めつゝいよ／＼
 御宿驛下車、驛前には多くの自動車
 が居並んでゐる、其の中にこれはまたと
 も古典的な一臺のトテ馬車が、雄姿
 ?を堂々と現してゐる、よく舗装され
 てゐる道路を行くこと二丁計りにして
 町役場に着く、刺を通じて我等は二階
 會議室に案内されたが、これはまたモ
 ダンの建築、驛前のトテ馬車との「コ
 ントラスト」には少なからず奇異の感
 にうたれ、茶菓の接待をうけ御宿町勢
 一般を戴きやがて神定町長から統計一
 般に就き説明があり色々感想に付い

ても語られた、誠に敬服の致りである
 また卓上に山と積まれた統計書類を一
 つ瀧口主任が懇切に説明に當られる、
 特に主任の製作になるといふ字限耕地
 圖の如き、並大低の苦心で出来るもの
 ではない、すべての書類は立派に装幀
 されており、調査員優遇法等も是を精
 神方面に重きを置いて、町名譽職並の
 取扱ひをなし、また奉仕的勞務等は、

すべて日頃の勞苦に免じて、是を免除
 する等、致れり盡せりである。一同感
 激に滿されつゝ役場を辭して再び車中
 の人となり愈々歸途に就く統計模範の
 粹を求めてこれをわか参考資料となし
 同時に自然の風光に浴して心氣の轉換
 に資し身心ともに更生を計り得た今回
 の縣外視察旅行は誠に意義深き企圖で
 あつた。



新宿御苑拜觀の記

西次城郡南川根村

書記 小 沼 義 男

『當日は晴雨に拘はらず拜觀せらるべ
 し』との縣よりの嚴達に憂慮された前
 日の天候は片雲も無く未明の空に星は
 降る様に輝く、めぐまれた十一月十七
 日本村統計調査員一行十二名は早くも
 午前五時全員支障なく岩間驛へ集合、

五時四十分發車に乗つたが人の子一人
 見えない寂莫さだ、車の中央に頑張つ
 た吾々一行の心も話も既に帝都の空に
 走つて居る。茶目子の一人スチームの
 湯気で曇つた窓硝子へ早速の落書、
 『南川根村特別仕立臨時列車』

土浦近く成つてやうやく朝日がさし初めの眺も美しい『あの山林の間の畑は何町何反歩位ひあるだろう』この水田は稲架の工合から見て反當何石何斗位か』等調査員の本能は至る處發揮される、愈々家達の中へ入つたと思つたらもう上野だ八時が五分前ぐつ／＼して居られない、早速圓タクを拾つて一臺六人宛都合十二人を二臺へ押込んで運轉手がこぼすことこぼすこと。

新宿一丁目御苑門前で先づ身の邊りを繕ひ緊張して受付を終る『向ふの休憩所でお待ち下さい』係官の指圖を受け十分程待つ中に他郡他町村からも約二百名程参集する『南川根の方は御見えに成りませんか』農林省統計課の森松統計官補殿だ種々同氏の御厄介に成り約一時間半に亘り苑内を拜觀の光榮に浴し更に同氏の案内にて農林省統計課を訪れた、既に縣廳よりも手續をして置いて貰つたので快く課長室迄案内される、吾々より一足先き高知縣の統

計關係の方七、八名がやはり統計課を訪問して居たので計らずも他縣の方とも農林統計を語る事が出来た、尙ほ課長殿の訓話中に茨城は高知の先輩である、茨城の統計は實に全國の模範であると訓された時、吾々一同は其の名譽を誇ると同時に責任の重且大なる事を

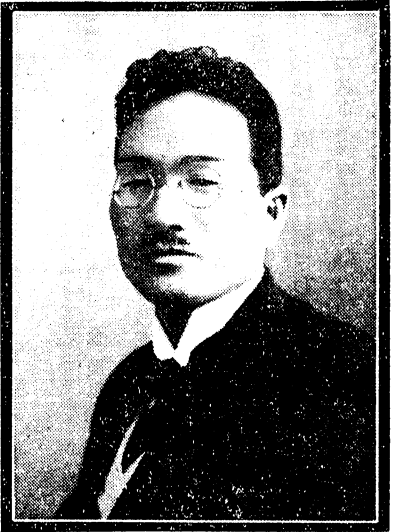
悟り茨城統計の名を傷けてはならないと心に深く刻み付けられ午後二時本廳を辭し評議一決國技館の菊花大會を見物、更に夜の淺草を廻り思ふまゝ大都會の一日を満喫して午後六時五十分華やかなネランサインに別れを告げ闇の鐵路を歸村の途に就いた。

寄贈圖書

- | | | | |
|----------------|-----------|------------------|---------|
| 下館町報 | 下館町役場 | 卸賣物價月報 | 九月分 |
| 和歌山縣勢 | 和歌山縣統計協會 | 商工大臣官房統計課 | |
| 統計界 | 岩手縣統計協會 | 昭利十年福岡縣泰誠統計書 | 福岡縣 |
| 昭利十一年學事統計要覽 | 愛媛縣 | 家禽統計書 | 全 |
| 資源 第十二號 | 資源局 | 全麥、交種統計書 | 全 |
| 第四回南洋羣島統計年鑑 | 南洋羣島 | 浪華の鏡 | 大阪府統計協會 |
| 昭利十一年關東局人口動遷統計 | 關東局 | 統計 | 千葉縣統計協會 |
| 綿織物月報 十月分 | 商工大臣官房統計課 | いしずゑ | 福岡縣統計協會 |
| 貨銀統計月報 全 | | 昭利十年度貯金局統計年報第四三回 | 貯金局 |
| | | 列國資源撮要第三號 | 資源局 |

本誌編輯囑託

富岡福壽朗氏計



水戸市北三ノ丸に住し、茨城タイムスを主宰經營してゐた富岡福壽朗氏は豫て病氣加療中であつたが、殆んど全快するに至りたる處病勢急變して十二月廿四日午後九時半自宅で逝去された。享年五十。氏は明治廿年結城郡總上村大字小島に生れ下妻中學を中途にして上京游學し明治四十三年常總新聞を経ていはらき新聞社に入り斯界に麗筆を揮ひ、當時茨城歌壇の「木星」を主宰し、大正六年東京日日新聞水戸支局長を経て同仙臺支局長となり昭和二年し名編輯振りを稱へられてゐたものである。告別式は廿七日自宅に於て行はれ水戸市神應寺に埋葬本會よりも其の計を悼み花輪を供へ役員全部會葬した(寫眞は富岡氏)

投稿歡迎

- 一、種類に制限ありません(論說所感、體驗實記、質疑、文藝其の他)奮つて投稿されたい佳作には賞品を呈します。
- 一、用紙は成るべく原稿紙とし文字は明瞭に書かれます。
- 一、原稿には住所氏名を明記すること。(但し誌上の匿名は差支ありません)
- 一、原稿の取捨採否は編輯部に一任されたい。
- 一、三月號は二月二十日迄に送付のこと。
- 一、原稿は一切返送しません。
- 一、宛名は「茨城縣廳統計課内茨城縣統計協會編輯部」宛のこと



短歌

丹 四郎 選

題「冬雜詠」「雪」

〔賞〕 鹿兒島縣伊佐郡西太良村針持 西 登幾也

片空によどむ朝の茜雲雪となるらし風冷えにけり
旅遠く來にけるからに山々の雪の白さが心にしむも

北相馬郡菅生村 倉持 保光

米生産實收高を調べつゝ螟虫の害のおほきに驚く
皎々と月照り明る空低く飛びゆく雁の羽音氣ざむし

川越市久保町 藤 介 晴儀

さりげなく語り來つれど妹の手の皸哀し今も目に見ゆ
ひとごころ空しきものか離りをればいつかかたみに疎くなり

(奉公の妹)

行方郡武田村 小貫九郎男

震ふる宵の寒さや立ちいでて馬にやるべき粥炊きにけり

福岡縣粕屋郡席内村 江川 敦

野のはてにともし灯漏る家ありてこの雪の夜をまだ閉ぬらし

東京市世田ヶ谷區野澤町 琴 柴 勝 三

山の雪うつす湖心のひそげきに鴨獵の銃ひびき渡れり

國領市船見町 關 根 櫻 月

ささゝかの雪ふりければ幼子は櫓持ち出し聲あげ遊ぶ

岡山縣後月郡縣主村 山 本 丘 月

高々と夜空は晴れぬ遠つ峯雪明りつゝ更けゆきにけり

久慈郡黒澤村 金 澤 幸 一

三日月のかけほのかなりひと本の楠の木末を渡る木枯

札幌市外南十一條伏見 松 田 白 樹

粉雪に日は暮れはてぬ赤々とゐるりに燃ゆる櫓の火明り

鹿島郡中野村 大 川 貞 貞

ながくと川筋みえて大利根の堤の家は雪に埋るゝ

宮城縣本吉郡歌津村 及 川 武

今日もまた雪降りやます納屋に入りひとりひねもす藁細工す

和歌山縣那賀郡池田村 福 田 富 一

隣り家の手洗鉢の水割る音まこゆなり大霜の朝

北海道雨龍郡深川町 大 坂 禧 一

雪晴れし出家の軒に陽は伸びて雑木疎林の道明りせり

冬の日のぬくとき今朝は老いませる父上も來て麥時き給ふ

北見國宗谷郡稚内町 五十嵐 光治

北見山麓廣野を行く馬櫓のはつはつ見ゆる雪明りかな

大原村小原 來 崎 洗 女 郎

しきりに落ち來る軒の雪等納屋に聞きつゝ俵あみけり

東京市牛込區赤城下町 鈴 木 照

廣々し枯はちす田の夕寒み速根掘れるひとまだ居り

海ぎしの竹むらひくし潮風あからみてなる葉音のかたさ

大連市乃木町 川 本 幸 貞

更くるまゝに雪のつもれる大通り行く人まれにネオンうつせ

り

北相馬郡東文間村 宵 雪 汪 入

收穫のかたつきにけるこの朝をこころゆるびに寝過しにけり

高知縣香美郡山南村 岩 川 靜 可

向つ家に薪割る音きこえつゝゆふべ降り積む雪止むとなし

大阪市北區黒崎町 古 寺 七 五 三 二

雪しづれ池に落ち込む音にぶく折々立ちて今宵長しも

結城郡西豊田村 神 谷 草 二

雪の日は心安げく終日を袋をし編むと納屋に籠れり

新潟縣北蒲原郡岡方村 宮 城 洗

雪深き河下見ればあきらけく雪の竹むら河にたれたり

栃木縣芳賀郡中村 菊 地 探 琳

福藁の上によろ／＼と白雪のつもりて明けぬ今朝のわが庭

行方郡武田村小貫 境 草 風

ゆふぐれの畦の落穂を啄ばめる小鳥せはしも雪催ひの空

宮城縣東吉郡歌津村 高 橋 虎 太

雪晴れし道に冷めたく月しろの光り流るゝ夜更けなりけり

長野縣北安曇郡社村 遠 藤 佐 撫 朗

安曇野をただ一押に吹きまくるアルプス下の雪まじりの風

富山縣東礪波郡城端驛前 前 川 曉 花

うからみない寝しづまりし小夜更けて外の面しづけく雪降る

けはひ

行方郡延方村新宮 黒 須 一 雅

赤き實を食みこほしつゝ庭つ木に小鳥來て居り雪の朝を

久慈郡賀美村折橋 井 上 仁

霜降りし藪の小笹に日はさしてこの風凧を光りつゝ見ゆ

栃木縣那須郡狩野村 石 澤 喜 六

武藏野をただ一色に降り埋め今朝の白雪日に輝けり

次回

課題「早春雜詠」「梅」十首以内



前田猶春選

題『炬燵』『冬木』

うつぶせのうなじなまめく炬燵かな
 長野縣上伊那郡 河平 静泉水
 アンテナに夜の風鳴る炬燵かな
 北海道夕張郡 山田 政夫
 窓近く氷柱光れる炬燵かな
 同 札幌市外 松田 徳次郎
 古本を散らせし室の炬燵かな
 同 中川郡 原 泰二
 読み飽きて人形とあそぶ炬燵かな
 福岡縣粕屋郡 江川 孜
 演習の軍馬嘶く冬木かな
 同 同 人
 吹きある、砂塵の中の冬木かな
 多賀郡磯原町 長瀬 一風

神棚の灯し明るき大炬燵
 同 同 人
 我を迎へに出でし母見巾ゆ木立
 能登國羽咋郡 小笠原 進草
 雪晴の山を見てゐる炬燵かな
 同 同 人
 冬木坂登りつめたる薬師かな
 栃木縣那須郡 石澤 喜六
 白々と大根かけし冬木かな
 同 同 人
 夕曉の空を寝て見る炬燵かな
 東京市目黒區 只野 井也夫
 友の來て炬燵の上の獎棋かな
 同 同 人
 筑波郡久賀村 渡邊 青水
 枯蔓のほそくとある冬木かな
 同 同 人
 富山縣東礪波郡 前川 曉花
 山宿や冬木の風を夜毎きく
 宮崎縣延岡市 田中 秀子
 置炬燵淋しく人の老いにけり
 同 同 人

讀むとなく句集ひろげて炬燵人
 大阪市北區 古寺 七五三二
 留守居してひとりねむたき炬燵かな
 滋賀縣長濱町 小川 漫川
 焼鳥の屋臺をまねぐ炬燵かな
 行方郡武田村 北浦 繪波湖
 夜もすがら風鳴りやまぬ冬木かな
 同 同 人
 埴 草風
 尿する僧に鳥たつ冬木かな
 岡山市岩井 角 南光男
 鹿島郡中野村 大川 貞
 ゆくまゝに車窓あかるき冬木かな
 北相馬郡東文間 堀 越 宵雪
 山門を見あげつゝ入る冬木かな
 行方郡延方村 黒須 惠三郎
 うたゝ寝の枕に遠き炬燵かな
 埼玉縣北埼玉郡 鈴木 峰月
 たちならぶ冬木映れる古江かな
 大分縣四杵町 朝風 春宵子
 こんな壯嚴の夕空がある冬木かな
 同 同 人

冬木影玻璃戸にぬくし揺をそる
 同 同 人
 倉持 公太郎
 嶺々の雪語りつゝ樵る冬木かな
 北相馬郡高野村 今泉 蘆汀
 鴉去りて冬木もすでに暮るゝ色
 東京江戸川區 埴 野里廣
 置炬燵涙にしめる一夜かな
 行方郡武田村 沼 尻 蛙村
 結城郡豊加美村 菊池 探琳
 たそがれの炊煙からむ冬木かな
 栃木縣芳賀郡 川上 二遊
 賀状山とつみたる朝の炬燵かな
 尾道市外 同 同 人
 すさまじき月となりたる冬木かな
 同 同 人
 貼りかへて白き障子や冬木宿
 那珂郡村松村 萩原 三雄
 動き居る冬木の上の尾根の雲
 新治郡瓦倉村 同 同 人
 人も馬も黙々として冬木みち
 同 同 人

嶽の雪 讃ふ温泉宿の炬燵かな 内田六統生

芋の皮 炬燵の中に燻りけり 同 運田一笑

雪の夜の炬燵に孫と語りたり 熊本縣八代郡 米田正夫

定まらぬ阿蘇の煙りや冬木立 北相馬郡養生村 倉持保光

秀逸

雪しつる音に更けゆく炬燵かな 新治郡瓦倉村 増子よし女

馬葬る灯かけたる冬木かな 筑波郡久賀村東栗山 間宮陽夫

筆硯の塵をうとみて炬燵人 天(賞) 熊本縣八代郡葉木小學校 米田正夫

次の課題

題「残雪」「櫻」(花にてもよし)

秀逸 粗賃を呈す 縮切 三月五日



「初詣」

柳川

山中緋郎選

初詣で母とは別な娘の願ひ 熊本縣八代郡鏡町内田 齋藤正劍坊

初詣り鳩へ一皿豆を買ひ 行方郡武田村 小貫九區男

初詣坊も社殿に跪き 水戸市袴塚町 大高靜香

初詣ポチも後からついて来る 東茨城郡石塚町 田上光夫

初詣酔ふて歸つて叱られる 眞壁郡川西村 大久保 實

石段へ子を危ながる 西茨城郡大原村 來栖浩太郎

討匪隊武装のままの初詣り 満洲國開原殿島街 古市 贊六

戀人ともう逢つてゐる初詣り 行方郡大和村 内田六統生

初詣り何か安心した氣持 岩手縣花巻町 加賀谷 審三

初詣りやはり若さが目立つなり 北相馬村東文間村 堀越 正直

拍手も夫婦してうつ初詣り 大阪府南河内郡藤井寺町 藤井 眞

頬冠りして初詣り早いなり 東茨城郡石崎村 長洲 直男

出戻りに思ひ出深い初詣り 金澤市西堀川町 平田他 四郎

苦しみを越した楽しさ初詣り 千葉縣君津郡秋元村 島野 樂道

神前に額づく頃の屠蘇の酔 行方郡武田村 鳥次とり坊

父さんの厄年であり初詣り 名古屋市中區 内田 正敬

秀逸

初詣親の許さぬ人と來る 福岡縣席内村 江川 孜

次號課題「表彰」

縮切 二月二十日 葉書一人五句以内 宛名 茨城縣統計協會編輯部

○編輯部よりお願ひ

短歌、俳句川柳共縮切目を遅れる方がありますが縮切後の投稿は掲載出来ませんから必ず遅れぬやうお投稿下さい

茨城統計と

廣告の効果

『茨城統計』は縣下三百八十ヶ市町村及び各市町村の統計調査員約四千名は勿論縣下各種團體、會社、工場等に配付し、中央各省、道府縣へも漏れなく配付するものにて廣告の效果偉大なるものがあると信じます。

- 本誌の廣告料金は左の通りです。
- 特別 (一頁(表紙表裏)) 金拾五圓
- 特別 (半頁(同)) 金八圓
- 普通 (半頁) 金四圓
- 普通 (四分ノ一) 金貳圓

- 同一廣告を引續き二面以上おときは、一割五分五厘以上のときは二割の割引をします。
- 廣告に寫眞挿入又は木版を要するものは其の費用を別に申受けます。
- 廣告料は前納に願ひます。

茨城縣統計協會

編輯後記

新年おめでたう。此のおめでたうも、本誌でもう三回申し上げることが出来たことは、ほんとにおめでたいことである。斯うしておめでたいを重ねて行くところに、豫期の発展が得られ『統計茨城』が待つてゐるのだ。

× ×

しかし此のおめでたい新年號に本誌創刊以來編輯囑託として事務を執掌した富岡福壽朗氏の計を傳へねばならなくなつたことは返す／＼も残念なことである。同君は温厚な眞の文人で、又人格者であつた、全く惜しい人が死んでしまつた。

十二月と云へば町村も縣も米生産統計調査の眞つ盛り、検査に、集計に、目の廻る様な忙しき、夜遅くまで算盤と首つびきのバチ／＼、疲れて歸れば其の儘ぐつたり、何として原稿等が書かれよう、それが終へてさあ一月號の準備といふ所で富岡君の計

だ如何にあわてたとて、一冊に纏める迄には並大抵ではなかつた。

×

それで本誌は、全然素人が記事を書き、素人が編輯、いや編輯と云ふよりは、次ぎ／＼並べたと云つた方がよい、御寛怒の程御ねがひする。

×

しかし次號よりは、元いはらき新聞記者たりし加藤敬愛氏が、富岡氏の後をうけて本誌に麗筆を運ばれることであるから、更に一新した雑誌が出来るであらう。

×

本誌が出ると、もうぢき田舎のお正月だとして舊の元日が恰も紀元節、これは神武天皇御即位の年と同じで、こんな珍らしい年はなかなか來ない、此の日附で農林大臣や知事や、統計協會總裁より又々表彰される人があるだらうが、此の意義深き日に表彰される人こそ、何たる幸福であらう。

×

正月が終へるともう春だ。また春季調査だ。調査票の欄外記入、調査原簿の加除整

理、耕地圖の訂正等、調査員として爲さねばならぬ準備がいろいろある、正月気分もまづそこ／＼にしてかゝらねば今年の調査も上々の結果は得られまい。一年の計は一月に在りとか云ふが農業に關する生産統計で春が此の一月に當る譯だ春の調査が遺憾なく出来れば夏も秋も冬も容易に調査が行へる譯だ。今年こそ／＼誰にも負けぬ立派な査調を爲し遂げよう。

昭和十二年一月十三日印刷
昭和十二年一月十五日發行
(隔月一回十五日發行)
一部金十錢

水戸市北三ノ丸茨城縣廳
茨城縣統計協會内
發行兼編輯人 川崎末吉
印刷所 柴印所
水戸市南三ノ丸一〇七ノ二
印刷所 柴印所
水戸市北三ノ丸茨城縣廳内
發行所 茨城縣統計協會